

タイトル	木下利玄『銀』初版本評釈（下）
著者	田中，綾； TANAKA, Aya； 山田，航； YAMADA, Wataru
引用	北海学園大学人文論集(66)： 162(一)-106(五七)
発行日	2019-03-31

木下利玄 『銀』 初版本評釈（下）

田 中 綾・山 田 航

キーワード 木下利玄、「白樺」、「心の花」、「学習院輔仁会雑誌」

【凡例】

- ・ 歌番号は本稿での便宜上のものである。
- ・ 歌番号の上に「*」があるものは、菱川善夫『木下利玄集』『日本近代文学大系55 近代短歌集』角川書店、一九七三年 以下、「菱川（1973）」で評釈された歌である。
- ・ 初出歌の傍線部は、初版本との異同箇所である。
- ・ 雑誌名「心の花」は、表紙や奥付に「心の華」「こゝろの花」など複数の表記があるが、「心の花」に統一した。
- ・ 作品の旧漢字は新字に改め、明治・大正期は時代性を加味して元号表記を優先した。

「夏」

* 205・初夏の真昼の野辺の青草にそのかげおとし立てる櫛の木

【初出】「白樺」三巻七号(明治四十五年七月)「草」異同なし

〈通釈〉初夏の真昼の野辺に生える青草にその陰を落として櫛の木は立っている。

〈山田〉丁寧な写生の歌。「初夏の真昼」(日時)から「野辺の青草」(近景)を経て「立てる櫛の木」(遠景)というようにカメラアイが移り変わっている。

〈田中〉初出では、この前に「売りに来し籠の鮎買ひにほひかぐ六月初めとある昼前」「清き瀬に鮎の泳ぐを橋の上に見下^{おろ}居たる何処やらの川」の二首があるが、どちらも歌集未収録。鮎解禁の六月であったことを前提に鑑賞すると、この「初夏」の爽やかさが、いっそう香り立つ。

* 206・踏切をよぎれば汽車の遠ひびきレールにきこゆ夏のさみしさ

【初出】「白樺」三巻八号(大正元年八月)「指(夏)」異同なし

および「心の花」十六巻八号(大正元年八月)「縋帯」

・踏切をよぎれば汽車の遠ひびきレールにきこゆ夏のさみしさ

〈通釈〉踏切を通過すると汽車の遠く響く音がレールに聴こえてくる。夏のさみしさである。

〈山田〉汽車とあるがこの時代はすでに電気軌道(電車)が普及していた。日本社会に鉄道はすでに馴染み、短歌の素材としてもよくみられるようになった時代の作品。しかし、踏切や鉄道を新奇なモチーフとしてではなく夏の風情と結びつけるのはまだまだ斬新な部類であったかもしれない。

〈田中〉「白樺」の初出では、この歌の後が208であり、「駒込の停車場」の近くを歌ったものと推測される。213とともに、

(11)

同時期の「心の花」にも出詠されていたが、同人誌と、所属の結社誌に同じ歌を投ずることは、現代の歌壇ではあまり認められないものではある。

207・菊に似し白き小花をおほくつけ夏草しげる汽車みちの堤

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」

・菊に似し白き小花を多くつけ夏草しげる汽車道の堤

〈通釈〉菊に似た白い小さな花を多く咲かせながら、夏草がしげる汽車道の土手である。

〈山田〉大正当時の鉄道は高い堤を築いてその上に線路を通していた。堤には青草がしげり、そこには菊に似ているものの名前のわからない白い小さな花が多くついている。鉄道が普及した時代だからこそ新しく生まれた花咲く風景に着目し、名もなき花の美しさを称えている。

〈田中〉ミヤマヨメナ、タカサゴソウはじめ、キク科の植物はさまざまにあり、「白い小花」を咲かせて風に揺れるものも少なくない。花の名前は特定できなくても、その愛らしさを心地良く見ているまなざしを感じ取ればよいのだらう。

208・駒込の停車場に来ればあはれにも萩のほへる七月の末

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」 異同なし

〈通釈〉駒込の停車場に来ると、あわれにも萩が匂う七月の末だ。

〈山田〉当時の駒込の停車場は、現在のＪＲ駒込駅にあたる。利玄の師匠・佐佐木信綱がこの年の七月に神田から旧駒込西片町に転居しているため、新居を訪問するために駒込を訪れたのではないかと推測できる。秋に咲く萩が七月末に

してすでに匂っていたことで少し早い夏の終わりを感している。

〈田中〉国有鉄道の駒込駅は、明治四十三年十一月に開業したので、利玄がこの歌を作った当時は新しい「停車場」であったことがわかる。七月の末、夏の盛りであるが、そこに秋の花である「萩」が早くも咲いていた。次の季節を感じ取り、「あはれ」という心の動きがあったのだろう。

209・汽車とまり汽車の出で行く停車場のダリヤの花の昼のくたびれ

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」 異同なし

〈通釈〉汽車がとまり汽車が出てゆく停車場に咲くダリヤの花が昼にくたびれている。

〈山田〉汽車がひっきりなく出入りを繰り返してゆく停車場に慌ただしい昼の風景を、ダリヤのくたびれ具合に着目して描いている。

〈田中〉初出では、この歌の後が214であり、この「停車場」は上野に近い駅かもしれない。

210・草堤の茅が根もとに野いばらの白く泣き居る夏の停車場

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」

・草堤の葺が根もとに野いばらの白く泣き居る夏の停車場

〈通釈〉草堤の茅の根もとに野いばらが白く泣いている夏の停車場である。

〈山田〉これもまた鉄道の通る線路の堤に咲く花を描いたもの。白い野いばらに擬人法を用いて「泣いている」と表現している。

〈田中〉自生する「野いばらの花」は、夏の季語。29でも「ほのくくとわがこ、るねのかなしみに咲きつづきたる白き

野いばら」と歌われていた。

211・夏草のにほひの中にたゞ^マずみて物思ひ居れば日のかげろへる

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」

・夏草のにほひの中にたゞずみて物思ひ居れば日のかげろへる

〈通釈〉夏草の匂いの中に佇んで物を思っているとき日が陰ろうとしている。

〈山田〉日の長い夏にもかかわらず日が陰りだすほど長い時間物思いにふけていた。この年の秋に初めての子どもが誕生予定であった。

〈田中〉初出では205の後にこの歌があり、六月の鮎の香気、そして、初夏の夏草の生命力の中に身を置いていると鑑賞できる。初めての子・利公が秋には誕生予定であったので、父になるという「物思ひ」にふけていたのかもしれない。

* 212・夏草のしげみがなかにうつむける釣鐘草のよそくしさまよ

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」 異同なし

〈通釈〉夏草のしげみのなかにうつむいている釣鐘草のよそよそしいさまよ。

〈山田〉その名の通り釣鐘状の花を持つ釣鐘草の花びらが下を向くさまを、うつむいている姿にたとえてよそよそしく控えめな態度の人物にたとえている。

〈田中〉「釣鐘草」は夏の季語で、鐘状の花をもつ植物の総称である。北原白秋にも、「入日うくるたらたら坂のなかほどの釣鐘草の黄なるかがやき」（『桐の花』大正二年）がある。

* 213・白き指に紅のにじみてなまめけるにほやかさもて咲く葵かな

【初出】「白樺」三巻八号(大正元年八月)「指(夏)」異同なし

および、「心の花」十六巻八号(大正元年八月)「繙帯」異同なし

〈通釈〉白い指に口紅がにじんんでいるなまめかしいかぐわしさをもちながら咲く葵よ。

〈山田〉白い葵の花は、中心部の柱頭から放射状に赤みが伸びている。そのさまを、色白な指の先に紅がにじんんでいる色っぽい女性の姿にたとえている擬人法の歌である。

〈田中〉「葵の花」は夏の季語。古くは『万葉集』にも用例がある。「梨棗黍に粟つぎ延^はふ葛の後も逢はむと葵花咲く」(巻十六・作者不詳)。

214・ぐらんどの手植ぎよくらん東京の上野の夏をさびしらに咲く

【初出】「白樺」三巻八号(大正元年八月)「指(夏)」

・ぐらんどの手植ぎよくらん東京の上野の夏をさびしらに咲く

〈通釈〉グラント将軍が手植した玉蘭は、東京の上野の夏を寂しげに咲いている。

〈山田〉「ぐらんと」はアメリカ合衆国第十八代大統領のユリシーズ・グラントのこと。大統領任期終了後に夫婦で世界を周遊し、上野公園で記念植樹を行った。玉蘭(泰山木)はアメリカ原産の植物で、この植樹をきっかけに日本中に知られるようになった。植樹から三十三年が経過した時点の歌であるが、その間にグラント大統領の歴史的评价も変わり、また上野の風景も大きく変化した。単に上野というだけではなく「東京の上野」としていることで日本そのものの変質に目を向けようとしている。

〈田中〉明治十二年八月、国賓として来日していたアメリカのグラント将軍夫妻が、上野公園で記念植樹を行った。夫

人が植えた泰山木は「グラント玉蘭」と称され、それを歌ったのだろう。初出では「ぐらんど」だったが、歌集では「と」の表記に訂正している。

215・何の木に咲ける花にや水無月の夕ぐれ君の門にはほへる

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」

・何の木に咲ける花にや水無月の夕ぐれ君の門に匂へる

〈通釈〉何の木に咲く花だろう。水無月の夕暮れどき、君の家の門に匂っているのは。

〈山田〉六月の夕暮れ時に君の家の門を訪れると、花の匂いだけがする。何の木に咲いている花の匂いなのかはわからない。匂いだけが広がりその主は見えないという状況が、まだ「君」のもとへはたどり着かず門の前にいるという状況と重なっている。

〈田中〉「水無月」は六月であり、「白樺」七月号の「草」一連と同じころに作られた歌ととってもよいだろう。六月の夕暮れに、大切な人の「門」の木に咲いていた花に心惹かれ、それを思い出していたようだ。

216・うちしめり街のどよめききこえ来る山の手町はかなし夏の夜

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」

・打ちしめり町のどよめききこえ来る山の手町はかなし夏の夜

〈通釈〉しっとりとして町のどよめきが聞こえてくる山の手町がものがない夏の夜である。

〈山田〉夏の夜の雨などでしっとりとした湿気を帯びている山の手町の賑やかさに物悲しさを感じている。東京において山の手と呼ばれていたのは江戸時代の武家地跡の地域であり、利玄が育った四谷区もそこに該当する。「白樺」の仲間

ある武者小路実篤や志賀直哉もやはり山の手にくくられる麴町区の育ちである。下町ともまた異なるとよめきが、山の手には響いていた。

〔田中〕東京には、「山の手町」という地名はない。江戸城から西の麻布、麴町、北は本郷の丘陵地に至る江戸の武家の跡地が、一般に「山の手」とイメージされている。利玄や「白樺」の同人たちは山の手側の人々であり、町人地であった下町の庶民的な雰囲気とはまた異なる。そのような雰囲気を対照化して歌っているようだ。

217・茶屋女うちは持つ手の汗ばみの昼のけだるさきりぐすなく

〔初出〕「心の花」十六巻八号（大正元年八月）「繻帯」

・茶屋女団扇持つ手の汗ばみの昼のけだるさきりぐすなく

〔通釈〕茶屋女が団扇を持つ手の汗ばんでいる昼のけだるさよ、きりぎりすが鳴いている。

〔山田〕茶屋女とは料理屋で酒の酌や遊興の相手をする女のこと。まだ料理屋も忙しくない昼間に汗ばみながら団扇を扇いでいるけだるい情景の中に、きりぎりすが鳴く音が聞こえてくる。きりぎりすは初秋の季語であるが、夏もよく鳴いており、典型的な東京の夏の昼間の風情として描かれている。

〔田中〕48「茶屋女身をすてばちのあゆみぶりさくらしらみてひゆる夕方」にも「茶屋女」が歌われていたが、ここでは夕方ではなく「昼」のけだるい情景となっている。

* 218・恐ろしき黒雲を背に黄に光る向日葵の花見ればなつかし

〔初出〕「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」

・恐ろしき黒雲を背に黄に光る向日葵の花見ればなつかし

および、「心の花」十六卷八号（大正元年八月）「曙会記事」兼題「忘」「黄」「如」明治四十五年七月十三日

・恐しき黒雲を背に黄に光る日向葵の花見ればなつかし

〈通釈〉恐ろしい黒雲を背にして黄色く光る向日葵の花を見るとなつかしさをおぼえる。

〈山田〉雷雨を招きそうな恐ろしげな黒雲をバックにしながら、光るように黄色い向日葵の花に好感を覚えている。「なつかし」は単なる郷愁ばかりではなく、あらゆる感情の入り交じったもつと複雑な感情であろう。黒と黄色のコントラストがよく効いている。

〈田中〉同年七月の曙会に出詠され、「全体として最も議論の沸騰した」歌として記録されている（記録者は角鷗東）。評としては、「咄嗟な而も深刻な感じがよくあらはれて居る、そして又或る部分には悲壯な感じも見えて居る（略）そこに人世の或る部分的の影も見える」（十五郎）、「自分の敵として居る黒雲を背にして日向葵の花が立つて居るといふ所に何か人世の意味を含めた様にもあるらしく見える」（善文）など五つ。境涯詠として受け止められたようだ。「日向葵」の表記は原文のママである。

219・くろももつ葉ずるに紅き花つくる茨竹桃の夏のあはれよ

【初出】「白樺」三卷九号（大正元年九月）「夏の末」

・くろみたる葉末に赤き花つくる茨竹桃の夏のあはれよ

〈通釈〉黒みを持つ葉のさきに紅い花をつくる茨竹桃の咲く、夏のあわれさよ。

〈山田〉夾竹桃の花をよく観察した写生歌。夾竹桃は夏の季語である。毒性を持つ花としても知られ、葉のさきの黒みには毒につながる何らかの不穏さをみている。

〈田中〉初出が一連のものと離れているが、同じ大正元年作であり、そもそもはこういう一連で作られた歌だったので

ろう。歌集に編む際、徹底的に過去の作品を洗い出した利玄の構成意識がうかがえる。

220・からみあふ花びらほどくたまゆらにほのかに揺る、月見草かな

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（夏）」 異同なし

〈通釈〉からみあう花びらをほどくしばらくの間に、ほのかに揺れている月見草だね。

〈山田〉風に揺れながらからみあう月見草の花びらに、恋のイメージを託している歌。「から」「花」「たま」という上の句の頭韻がよく響いている。

〈田中〉「月見草」も夏の季語である。前田夕暮にも「月見草咲く川堤そのころのうけ唇くちをせし君おもひいづ」（『陰影』大正元年）という歌があり、どこか官能的なしぐさに見える花である。初出では、この歌の前に「奥行の深き家なり見通しの奥の庭より黄なる花見ゆ」「茎ゆれて動ける風に月見草蕾ほどけて軽き音する」の二首があったが、どちらも歌集未収録。

「指の傷」

* 221・わがこゝろかきみだされて胸つまる君が小指の白き繻帯

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（指の傷）」

・わが心こゝろかきみだされて胸つまる君が小指の白き繻帯

〈通釈〉私の心がかき乱されて胸が詰まる。君の小指の白い繻帯に。

〈山田〉倒置法を用いて強烈に心乱されるさまを表現している。「君」は前年に結婚したばかりの妻と思われる。何かしらの理由で小指を怪我して包帯を巻いている「君」が心配で仕方ないという歌であるが、小指が官能的なイメージも

想起させてくれる。

〈田中〉前年に結婚したこともあり、この「小指」の「君」は新妻だろうか。心配でならず、いとおしむ気持ちが官能的なしぐさで歌われている。

* 222・より添へばヨードホルムのうす甘きにほひ皮膚はだへに悩ましく沁む

【初出】「白樺」三卷八号（大正元年八月）「指（指の傷）」

・より添へばヨードホルムのうす甘きにほひ皮膚はだへになやましく沁む

〈通釈〉寄り添うとヨードホルムのうす甘い匂いが皮膚に悩ましく沁みる。

〈山田〉前の歌に登場する、小指を怪我した妻の治療のシーンだろう。「ヨードホルム」は大正当時傷の消毒薬として広く使われていた。現代ではより効果的な消毒薬に取って代わられ、あまり使われていない。薬の沁みるさまに官能的な表現を用いている歌で、ヤ行の響きを効果的に使っている。

〈田中〉「ヨードホルム」は、腫れ物など擦靴傷に効く薬。明治の雑誌広告にも出ており、知れ渡った薬名でもあった。

223・可愛さのわねなやましむ君がせる指の繃帯白くかなしく

【初出】「白樺」三卷八号（大正元年八月）「指（指の傷）」 異同なし

〈通釈〉可愛さが私を悩ませる君、その君がしている指の包帯が白くかなしくて。

〈山田〉「君」への愛が一身に詰まっている歌。包帯の白さがかなしさの象徴となっている。

〈田中〉初出では、この歌の後に「他の指の如くま白く柔かきかの指の傷かなし繃帯」「むつちりと白き柔手を医者たち
ちに任せ居る君おもかげに見ゆ」など十首があったが、すべて歌集未収録である。

224・風触れず指尖^{ゆびさき}熱き繃帯^{おび}を君苦にしつ、寝ねがてにする

【初出】「白樺」三卷八号（大正元年八月）「指（指の傷）」

・風触れず指尖^{ゆびさき}暑き繃帯^{おび}を君苦にしつ、寝ねがてにする

〈通釈〉風に触れることが出来ず指先が熱い包帯に君は苦しみ、寝られないでいる。

〈山田〉傷で熱を持った指先を空気に触れさせることが出来ずに寝苦しい夜を過ごす「君」を心配する歌。

〈田中〉以下、230までの七首は、初出の順序通りである。

* 225・なやましき夜の寝ざめに肉体を切に感ずる指の傷かな

【初出】「白樺」三卷八号（大正元年八月）「指（指の傷）」 異同なし

〈通釈〉悩ましい夜の寝覚めに、肉体の存在を切実に感じる指の傷だ。

〈山田〉怪我や病気によつてはじめて肉体の存在を強烈に感じることもある。そんな実感を込めた一首。「君」の傷であるにもかかわらずまるで我が事とまで感じるかのように強く感情移入をしている。

〈田中〉歌集未収録だが、初出の一連に「熟したる女の肉体^{かた}肥りたる指の尖なる傷の繃帯」と、「肉体」を歌ったものもあつた。

226・指尖^{ゆびさき}に身うちの熱のあつまりてうみ持つ傷の痛むあけ方

【初出】「白樺」三卷八号（大正元年八月）「指（指の傷）」

・指尖^{ゆびさき}に身うちの熱のあつまりてうみ持つ傷の痛むあけ方

〈通釈〉指先に体中の熱が集まっている。化膿した傷の痛む明け方に。

〈山田〉前の歌に引き続き強烈に感情移入しており、「君」の苦しみを自らのこととして感じているような表現である。〈田中〉まるで「君」と自分が同化して、その指先の熱を体感しているような心持ちである。視点が「指尖」から体内へと移り、結句を時間帯でまとめた、着地の良い一首。

227・繻帯の白きもすこしよこれつ、憎さもおぼゆ可愛さのはて

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（指の傷）」

・繻帯の白きも少しよこれつ、憎さも覚ゆ可愛さのはて

〈通釈〉包帯の白い部分も少し汚れながら、可愛さのはての憎さまでおぼえている。

〈山田〉長く巻いているうちに白い包帯も汚れてゆく。結婚してともに暮らしているうちに愛のはての憎らしさまで感じるようになってゆくことを、その汚れから予感している。

〈田中〉日常の動作につれて、少しずつ白い繻帯も汚れてくる。その当然の現象に対して「憎さ」を覚えると歌っているが、愛らしさと同意であるう。

* 228・君泣けばかの繻帯のよこれめのいよ／＼我を吸ひやまぬかな

【初出】「白樺」三巻八号（大正元年八月）「指（指の傷）」 異同なし

および、「心の花」十六巻八号（大正元年八月）「繻帯」

・君泣けばかの繻帯のよこれめのいよ／＼われを吸ひ止まぬかな

〈通釈〉君が泣けばあの包帯の汚れがいよいよ私を吸い付けてやまない。

〈山田〉「の」を重ねてズームアップしてゆく手法を用いている。包帯のみならずその汚れというさらに細かい部分に

私の心は引きつけられている。

〈田中〉 ドラマティックな場面展開だが、「君」との距離の近さがさらに官能性を引き立てている。

229・強き日にさすパラソルの日蔭の柄を握れる指の白き繻帶

【初出】「白樺」三巻八号(大正元年八月)「指(指の傷)」 異同なし

〈通釈〉強い陽にさすパラソルの陰で、柄を握る指にある白い包帯よ。

〈山田〉夏の陽のもとに外出したとき、包帯を巻いたままの指で日傘の柄を握る姿に着目している。強い日差しと白い包帯とを重ね合わせ、これまでの包帯の一連にない明るさを表現している。

〈田中〉夏の日射しの強さが、指の繻帶の白さを反射させ、効果的に用いられている。

230・指尖ゆびさきの傷の痛みにひびけつ、市街まちの電車でんしゃのきしるわびしさ

【初出】「白樺」三巻八号(大正元年八月)「指(指の傷)」

・指尖の傷の痛みにひびけつ、市街の電車でんしゃのきしるわびしさ

〈通釈〉指尖の傷の痛みにひびいている、市街の電車でんしゃのきしみのわびしさよ。

〈山田〉「市街の電車」とは都市部の電気軌道であろう。きしみが激しくよく揺れる車体が指尖の傷の痛みにひびいているのではないかと心配している。

〈田中〉初出でも最後に置かれ、室内から外に出るといふ、動きのある一連となっている。

「夕方に」

* 231・夕方に子供の遊ぶころとなり町にも下る青きうす靄くだ

【初出】「心の花」十六卷四号（明治四十五年四月）「曙会記事」兼題「築」「町」「重」おもし 明治四十五年三月十三日

のち、「白樺」三卷五号（明治四十五年五月）「夕方に」
・夕方に子供の遊ぶ頃となり町にも下る青きうす靄

〈通釈〉夕方になり子供たちの遊ぶ時間帯となった。町にも青い薄靄が下っている。

〈山田〉子供たちが遊び始めることをもって夕方を感じることは、学校制度の浸透した都市部の雰囲気を感じさせる。子供に優しい眼差しを注ぐ利玄の性格が出た歌である。日没寸前の青い空気はブルーモーメントと呼ばれる現象。

〈田中〉川田（1991）に、この歌の鑑賞文がある。「初夏の歌である。『夕方に子供の遊ぶ頃』とはなかなか考えた。（中略）その時刻には、靄がほんのりと地面に降りてくる。（中略）この歌も、利玄の長所をひそめて、将来を約束するものである」（四四頁）。また、五島（1987）でも秀歌として取り上げられ、「下旬がまたあざやかな叙景で気分がある。初期利玄の人なつつこい性分を内にこめて清新さをすがやかに出している作」（六三頁）とも評されている。

* 232・すかされて泣く目をやりし夕空に遠くやさしき月照り居たり

【初出】「白樺」三卷七号（明治四十五年七月）「草」異同なし
のち、「心の花」十七卷四号（大正二年四月）「曙会記事」兼題「風」「空」「囚」 大正二年三月十三日

・すかされて泣く目をやりし夕空に遠くやさしき月照りゐたり

〈通釈〉なだめすかされて泣いている目を夕空に向ければ、遠くにやさしい月が照っている。

〈山田〉「すかされて」は「賺されて」で、なだめて機嫌をとられている状態。「なだめすかす」の「すかす」でもある。幼少期の思い出の風景のようでもあり、子どもの視点に成り代わって詠んだ歌ともとれる。

〈田中〉泣く子どもが、なだめすかされていたのだろう。泣きつかれたころ、遠くの空に月がやさしく照って、見守ってくれているような場面である。幼少時独特の、やさしげな内容。曙会では「空」の兼題で歌われていた。

* 233・夏来れば築地の朝の好もしさ海の風吹く凌霄花

【初出】「心の花」十六卷四月(明治四十五年四月)「曙会記事」兼題「築」「町」「重」おもし 明治四十五年三月十三日

のち、「白樺」三巻五号(明治四十五年五月)「夕方に」
・夏来れば築地の朝の好もしさ海の風吹く凌霄花

・夏来れば築地の朝の好もしさ海の風吹く凌霄花のうぜんかつら

〈通釈〉夏が来れば築地の朝は好ましい。ノウゼンカズラに海の風が吹いている。

〈山田〉築地といえは中央卸売市場のある東京都中央区(旧京橋区)の地名として有名であるが、単に埋立地のことを指す用法もある。ただ利玄のこの歌は京橋築地を指していると思われる。夏の朝のさわやかな海風を、築地という都会的な場所で強く感じている。

〈田中〉「凌霄花」は夏の季語。佐佐木信綱の歌にも「虻あぶは飛ぶ、遠いかづちの音ひびく真昼の窓の凌霄花」(『新月』大正元年)がある。曙会の兼題「築」から「築地」を連想したことが新鮮であり、会でも話題になったようだ。曙会記事を見ると、松井恒がこの歌を「築地の辺に行けば、何となく快活な感じがする。それには夏の海の風が凌霄花を吹くと云ふ事が涼しげで、場所に適當して居る、窓の雨を詠んだよりも、此の歌の方を比較してとる」と評していた。

* 234・パラソルに通リ雲より雨落ち来^{かんばし}甲^{かん}走りたる声を立てつ、

【初出】「白樺」三巻五号（明治四十五年五月）「夕方に」

・パラソルに通リ雲より雨落ち来^{くかん}甲^{かん}走りたる声を立てつ、

〈通釈〉パラソルに通リ雲から雨が落ちて来る。甲走つた声を立てながら。

〈山田〉通り雲は流れてゆく雲のこと。きんきんと高く響くことを「甲走る」と言うが、パラソルに落ちて来るにわか雨の音を擬人的に「甲走る声」と表現している。同時に、雨に驚いて高い声をあげている女性のことも表現しているのだろう。

〈田中〉「日傘」は夏の季語で、「パラソル」も同様に夏の季語だが、ビーチパラソルの印象だろう。この歌では、ビーチパラソルではなく女性用の日傘ととらえたい。

235・むし暑く寝ぐるしき夜も青白うや、冷えそめて鳩なく声す

【初出】「白樺」三巻五号（明治四十五年五月）「夕方に」

・むし暑く寝苦しき夜も青白う稍冷えそめて鳩なく声す

〈通釈〉むし暑くて寝苦しい夜も、青白くなればやや冷えはじめて鳩のなく声がする。

〈山田〉熱帯夜も朝が近づき白んでくると少しばかり涼しくなりはじめて鳩のなく声がする。「青白さ」のイメージは朝の光、寒くなり始めた空気、鳩の体色にいつきにかかつており、不気味さも演出している。

〈田中〉初出では231の「青きうす靄」の後に置かれており、「青」色のイメージのつながりで鑑賞できたが、歌集編集にあたって、雨↓寝苦しき↓夜のおそろしさの記憶という物語にあらためたようだ。

236・大風の吹き過ぎ行きし遠き音き、つゝ居れば夜のおそろしさ

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」異同なし

〈通釈〉強い風の吹き去ったあとの遠い音を聞いていたら夜のおそろしさを感じる。

〈山田〉夏の強い風が去った後の遠い音に耳を澄ませながら、夜のおそろしさを感じている。どのような音かは明確にされないことも恐怖を暗示している。

〈田中〉「大風」は、台風とまではいかなくとも、特に夏に吹き荒れる強い風だろう。大風一過とはいえ、幼い頃にもその音におびえていた記憶などが引きずっているようだ。

* 237・はした女が厨くわの隅に泣いてゐる白き前かけしみぐ／＼かなし

【初出】「白樺」三巻六号（明治四十五年六月）「花壇と室内」

・はした女がくりやの隅に泣いて居る白き前かけしみぐ／＼かなし

〈通釈〉下女が台所の隅で泣いているときの白い前掛けがしみじみと悲しい。

〈山田〉はした女とは下女、召使いの女のこと。裕福な家の出である利玄にとつては身近な存在であったのだろう。唯一自分の自由にできる空間である台所の隅でひそかに泣いている下女の悲しみを、前掛けの白さに象徴させている。幼少期の記憶から作った歌であるうが、身分の低い立場の人々への同情的な眼差しは利玄に特徴的である。

〈田中〉明治四十四年十月十三日の曙会で、「井戸端に身をくやみなくはした女の白き前かけしみ／＼悲し」を提出していた（「心の花」十五巻十一号（明治四十四年十一月））。その改作と思われるが、その後も、「はした女が白前かけの前を持つ青きみづばの青の目にしむ」という歌を「春の肌身」（「白樺」四巻五号 大正二年五月）で発表している。歌集には未収録だが、「はした女」と「白き前かけ」というモチーフが強かったことがうかがえる。

* 238・泣き止みて頭のいたきたよりな^{をさむじ、ち}さ幼心地のふとよみがへる

【初出】「白樺」三卷六号（明治四十五年六月）「花壇と室内」

・泣き止みて頭のいたきたよりな^{をさむじ、ち}幼な心地のふとよみがへる

〈通釈〉泣き止んで頭の痛いときの心細さを幼い頃に感じていたのが、ふと蘇る。

〈山田〉子供の頃を回想する歌。頭をぶつけたときの痛みが泣き止んでもまだ残っているという状況とも解釈できるが、泣くこと自体が頭の痛さの原因になっていることに不思議と気付いていたと解釈する方が面白い。

〈田中〉幼時を回想する歌が『銀』には少なくないが、痛覚、そして「たよりなさ」という不安な感情が尾を曳いていくところは注目される。

239・おそろしき夏の闇夜に飛びかひし螢の燐の記憶かなしも

【初出】「白樺」三卷七号（明治四十五年七月）「草」

・恐^{おそ}しき夏の闇夜に飛びかひし螢の燐の記憶かなしも

〈通釈〉おそろしい夏の闇夜に飛び交っていた螢の燐の記憶がかなしい。

〈山田〉夏の闇夜に「おそろしい」と直接的な表現を使っているのが特徴的な歌。燐とは元素のリンのことではなく、自然の中にあられる発光現象の総称。利玄は闇夜に対して異様な恐怖心を表明する傾向がみられる。

〈田中〉大正元年七月作の、218「恐ろしき黒雲を背に黄に光る向日葵^{ひまわり}の花見ればなつかし」の原型が、この歌ではないだろうか。「螢」と「向日葵」のスケールは異なるが、黄色めいた光では共通する印象である。

240・風邪かぜの後始のちめて入れる湯上りのつかれに抱かれ物音をきく

【初出】「白樺」三卷六号（明治四十五年六月）「花壇と室内」

・風邪の後始めて入れる湯上りのつかれに抱かれ物音をきく

〈通釈〉風邪の後にはじめて風呂に入ると、湯上がりのの疲れに抱かれながら物音を聞く。

〈山田〉風邪が治ったあとに久々にお湯に入ると湯上がりのの疲れが著しい。その状態を「抱かれ」と表現している。そこで聞こえてくる物音の正体については語られない。

〈田中〉初出では、この後が237歌であり、「物音」を立てたのは白い前かけをつけたはした女だったとも想像される。

241・寝て見れば寝起のわるさ梅雨時のじめくとするもの悩ましさ

【初出】「白樺」三卷六号（明治四十五年六月）「花壇と室内」

・寝て見れば寝起のわるさ梅雨つゆどき時のじめくとするもの悩ましさ

〈通釈〉寝てみると寝起きが悪い。梅雨時つゆどきでじめくくくとするもの悩ましい。

〈山田〉病み上がりがになんとか寝ねてみるが梅雨時つゆどきで湿度しつどが多いためじめくくとして目覚めめが悪く悩なましかつたという

歌。

〈田中〉初出ではこの前に「日なた来て稍疲れつ、室内うちに入る日陰かげの冷たさ心持よさ」（歌集未収録）があり、発熱のせいかひんやりりとした室内うちに快かさを感じ取とっている。その疲つかれと、「梅雨時つゆどき」の湿度しつどとが重おもなつて不快ふかを覚おぼえたのだらう。
リアリティある内容。

242・梅雨時の執念き湿りしづみ居る厨の隅の生姜のにほひ

【初出】「白樺」三卷八号（大正元年八月）「指（夏）」

・梅雨時の執念き湿り沈み居る厨の隅の生姜のにほひ

〈通釈〉梅雨時のしつこい湿りが沈んでいる台所の隅に生姜の匂いがする。

〈山田〉「執念い」は今ではほぼ死語であるが「執念」から形容詞に転じた語。有島武郎『生れ出づる悩み』にも用例がみられる。目に見えない湿気を「沈んでいる」と表現している。台所の隅はそこで泣いていたはした女の領地ともいえ、彼女の悲しみが生姜の匂いに転じているとも考えられる。

〈田中〉初出の「指（夏）」の作品は、ほぼ205～220「夏」に収録されているが、この一首だけは離れてここに置かれた。前の歌の「梅雨時」の語と揃えたのだろう。

「薬」

* 243・鳩起きて軒のとやより挨拶す花壇の芥子は朝風に揺る

【初出】「白樺」明治四十五年六月「花壇と室内」異同なし

〈通釈〉鳩が起きて軒の鳥小屋から挨拶をしてくる。花壇のケシの花は朝風に揺れている。

〈山田〉とや（鳥屋）とは鳥を飼う小屋のこと。目覚めた鳩がなき、花壇のケシの花が風に揺れているようなさわやかな朝の情景であるが、ケシがアヘンの材料となることは明治時代の当時もよく知られていたため、不穏なイメージを裏側に込めているようにも読める。

〈田中〉吉原では、「鳥屋につく」という語があり、梅毒にかかることを差していた。鷹が羽が抜けて鳥屋にこもっているように、梅毒にかかると毛髪が抜け落ちてゆくことから関連という。この「鳩」をそういう女性と解する読みは

飛躍があるだろうが、官能的な作風を志していた利玄に、そういった解釈もありうるかもしれない。

(一一)

244・薔薇色に雲のほへば朝の唄鳩のうたひて花壇おとなふ

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」

・薔薇色はないろに雲のほへば朝の唄鳩のうたひて花壇おとなふ

〈通釈〉薔薇色に雲が映えれば、朝の唄を鳩がうたいながら花壇を訪れる。

〈山田〉朝焼けに染まる雲を薔薇色と表現し、花壇を訪れる鳩が朝を告げる唄をうたっている。さわやかでファンタジックな情景にもみえるが、243の歌の「鳩」の不穏さもあり、その情景を素直に受け取ることのできない歌でもある。

〈田中〉「おとなふ」は、「音なふ」「訪ふ」。鳩の鳴き声につられて、花壇もさまざまな色彩を歌い出したように微笑ましい。初出ではこの後に「病院の記憶まざくよみがへる白窓かけよ百合のほひよ」など四首があったが、いずれも歌集未収録。

* 245・真中まんなかの小さき黄色のさかづきに甘き香もれる水仙の花

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」異同なし

〈通釈〉真中の小さい黄色のさかづきから甘い香りがもれる水仙の花よ。

〈山田〉水仙の花の中心部をさかづきに見立てた歌。

〈田中〉247とともに「さかづき」を模した歌。初出ではこの前に「乳いろに緑にごれる芥子の葉はわれの心にしたしみ易き」「柿の木が黄色の芽ふく春の日に黒き雲出でかみなり雷のなる」の二首があったが、どちらも歌集未収録。

246・花びらの真紅しんくの光沢つやに強き日を照り返し居る雛芥子の花

【初出】「白樺」三巻六号（明治四十五年六月）「花壇と室内」

・花びらの真紅しんくの光沢つやに強き日を照り返し居る雛芥子の花

〈通釈〉花びらの真紅の光沢に強い日差しを照り返しているヒナゲシの花よ。

〈山田〉雛芥子は現在ではポピーとも呼ばれ広く親しまれている花。強い日差しを照り返す花びらの鮮やかな真紅の光沢に生命賛歌があらわれている。245と同様の構造になっている観察の歌。

〈田中〉初出でも246と248の並び順である。初出ではルビを多用していたが、「光沢」を「つや」と読ませることで、光に应じて光を発するような、応答の美しさが引き出された。

* 247・愛らしき金きんのさかづきさし上げて日のひかりくむ花菱草よ

【初出】「白樺」三巻六号（明治四十五年六月）「花壇と室内」

・愛らしき金きんの盃はみづさし上げて日の光くむ花菱草よ

のち、「心の花」十六巻八号（大正元年八月）「縹帯」

・愛らしき金きんのさかづき空そらさまに日の光くむ金盞花きんざんかな

〈通釈〉愛らしい金色のさかづきを差し上げて日光を酌む花菱草よ。

〈山田〉花菱草はカリフォルニアポピーとも呼ばれる花。245の歌の水仙同様、中心部をさかづきに見立て、さらに日光を酒に見立ててそれを酌んでいると表現している。

〈田中〉「花菱草」は、夏の季語。北アメリカの原産で、夏に濃い黄色の花を咲かせる。与謝野晶子に「夕にはもとの蕾にかへるなり花菱草になるよしもがな」（『太陽と薔薇』大正十年）がある。のちの改作では、春の季語である「金盞

花」として歌われており、異同が興味深い。

248・しほらしき野薔薇の花を雨は打つた、かれて散るほの白き花

【初出】「白樺」三巻六号（明治四十五年六月）「花壇と室内」異同なし

〈通釈〉しおらしい野薔薇の花を雨は打つ。雨にたたかれて散るほの白い花よ。

〈山田〉三句切れの歌。しおらしく咲く花よりも雨に打たれて散った花の方にあわれさを感じている。

〈田中〉咲いている花よりも、雨に打たれて散った花びらのはかなげな美しさに目を止めたものである。平凡な作ではあるが、さまざまな花を歌うことを自らに課していたのだろう。

249・ゆづり葉の新芽しんめかはゆしやはらかき緑もたぐる桃いろの茎

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」

・ゆづり葉の新芽かはゆし柔かき緑もたぐる桃色の茎

〈通釈〉ユズリハの新芽は可愛らしい。やわらかい緑も手繰るように動かす桃色の茎よ。

〈山田〉ユズリハは正月飾りに使われることから新年の季語となっているが、常緑樹のため一年中歌の題材となる。葉が緑色で茎が桃色がかっているという色彩の対比を中心に据えている。

〈田中〉「ゆづり葉」は高さ約六メートルの常緑高樹。季節を問わずに歌われている。

* 250・象の肌のけうとさおもふ椿の木枝さき重き花のかたまり

【初出】「心の花」十六巻四号（明治四十五年四月）「曙会記事」兼題「築」「町」「重おもし」明治四十五年三月十三日

・象の肌のけうとさ思ふ椿の木枝先おもき花のかたまり

のち、「白樺」三巻五号（明治四十五年五月）「夕方に」

・象の肌のけうとさ思ふ椿の木枝先重き花のかたまり

〈通釈〉象の肌の不思議さを思う。椿の木の枝先の重い花のかたまりに。

〈山田〉「けうとさ」は「氣疎さ」であり、「うとましい」「氣味が悪い」といったネガティブな意味合いで使われることもあれば、「素晴らしい」というポジティブな意味で使われることもある。この歌ではどちらかが判然としないが、象の肌の質感に奇妙なものを感じていることは確かだろう。上野動物園では一八八八年（明治二十一年）からすでにアゾウが飼育されていたため、利玄は象の肌の質感を実際に見たことがあると推測される。下の句のぎゅつと詰め込んだような音の響きが、重苦しさを演出している。

〈田中〉五島（1987）では、「象の肌のけうとさおもふ」は「妖しい官能さを映して「椿の木枝さき重き花のかたまり」にひびくものがあり」、「粘っこい把握に調子を出している」（六二頁）と評されている。生け垣に用いられる椿の花の重さに、「けうとさ（氣疎さ）」、しかも「象の肌」というものを取り合わせたところに新味がある。

251・黒もじのうす黄の花にやはらかき雨ふりそ、ぎ春の暮れ行く

【初出】「白樺」三巻五号（明治四十五年五月）「夕方に」

・黒もじのうす黄の花に柔かき雨ふりそ、ぎ春の暮れ行く

〈通釈〉クロモジのうす黄色の花にやわらかい雨が降り注ぎ、春が暮れてゆく。

〈山田〉クロモジは黄色い花を特徴とするクスノキ科の木。花は春頃に葉ともに咲く。花に降る雨から春の終わりを予感するという主題そのものは珍しいものではない。

〈田中〉クロモジ(黒文字)は低木で、落葉樹。枝が高給楊枝の材料となることで知られており、生活臭もそなえた印象を与える木である。

252・愛に酔ふ雌蕊雄蕊を取りかこむうばらの花をつつむ昼の日

【初出】不明。『木下利玄全集』(岩波書店、大正十五年)には、「大正元年」(明治四十五年も含む)作品として「八蕊」の題の中の一首として収録されている(七五頁)。異同なし。

〈通釈〉愛に酔う雌蕊と雄蕊を取り囲む野茨の花を包む昼の日差しである。

〈山田〉「うばら」とは野茨の古い呼び名。雄蕊と雌蕊の並ぶさまを「愛に酔う」と直截的に表現している。花の内部という小さなところから、昼の日差しという大きなところへ視点が広がっている。

〈田中〉初出は不明だが、雌蕊雄蕊が愛に酔っているという擬人化が効いている。「うばら(茨)」は夏の季語。

* 253・花びらをひろげ疲れしおとろへに牡丹重たく萼をはなる、

【初出】「白樺」三巻六号(明治四十五年六月)「花壇と室内」異同なし

および、「心の花」十六巻六号(明治四十五年六月)「曙会記事」兼題「褪」「衰」「起」明治四十五年五月十三日

・花びらをひろげ疲れしおとろへに牡丹重たく萼をはなる、

〈通釈〉花びらをひろげ疲れ、衰えた牡丹が重たく萼を離れてゆく。

〈山田〉「衰」という題詠に寄せた歌。牡丹の花を擬人化し、疲れて衰えた末に重たげにぼたっと萼を離れて落ちてゆくという様子を映像的に描写している。

〈田中〉五島(1987)によると、この一首は「利玄が旧藩主であった岡山市足守の近水公園の小島にある利玄歌碑の歌

で、旧藩士橋本忠治所蔵の短冊を使用して彫られたもの（六二頁）とのこと。川田（1957）に、この歌の鑑賞文がある。「数多い利玄の牡丹の歌の中で、右は最初に歌われた佳作である。ここでは牡丹は非情の植物でなく、むしろ生きた動物の如くに取扱われている。（中略）利玄は植物の生の中核を掴むことを始めたのであつた」（四三頁）。利玄が初期に「牡丹」を歌つたものには、「心の花」八卷三号（明治三十七年六月）の「やよひ会（東京）」で「風無きに牡丹花散る鴻臚館春暮方の夕べ淋しき」などがあるが、それに比べるとかなりこなれた歌いぶりになっている。

* 254・芍薬の黄いろの花粉日にたゞれ香をかぐ人に媚葉吐く

【初出】「白樺」三卷七号（明治四十五年七月）「草」

・芍薬の黄色の花粉日にたゞれ香をかぐ人に媚葉吐く

および、「心の花」十六卷七号（明治四十五年七月）「六月の曙会」兼題「日」「色」「草」明治四十五年六月十三日

・芍薬の黄色の花粉日にたゞれ香をかぐ人に媚葉吐く

〈通釈〉芍薬の黄色い花粉が日にただれてゆき、その香りをかぐ人に媚葉を吐く。

〈山田〉芍薬の花を擬人化した歌。花粉が陽の光を浴びて糜爛してゆくとイメージから、その香りをかぐ人に媚びてフェロモンのようなものを出しているという想像につながっている。「毒婦」的なイメージを芍薬に付与している。

〈田中〉曙会での兼題「色」での作。会では、佐佐木信綱が「官能的の歌として面白い。三の句五の句など殊に」と飛翔し、石樽千亦も「芍薬と云ふものを表はさんとして、此の組立此の用語を撰ばれたるは作者の用意周到の程察せられて敬服せり」と、好評であった。

* 255・桐の花露のおりくる黎明しの、あにうす紫あざいのしとやかさかな

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」

・桐の花露のおりくる黎明しの、あにうす紫あのしとやかさかな

のち、「心の花」十七巻二号（大正二年二月）「曙会記事」 兼題「破」「待」「露」 大正二年一月十三日

・桐の花露のおりくるしの、めに薄紫のしとやかさかな

〈通釈〉桐の花に露が降りてくる夜明け、その花の薄紫のしとやかさよ。

〈山田〉「黎明」とは夜明けの明るんでくる時間のこと。夜明けの露が降りてくる頃の、薄紫の桐の花を描いている。

〈田中〉「白樺」の作品は、時折「心の花」の曙会の出詠作と重なっている。これもその一例だが、ひらがな表記を工夫するなど、さまざま可能性を試していたことがうかがえる。曙会では、この歌について佐佐木信綱が「しつとりとして美しみのある歌。小暖き家の様な人生の歌もよいが、斯ういふ自然のもよいと思ふ」と評していた。

* 256・桃の実の肌のやうなるうぶ毛して少年の頬のうひくしさを

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」 異同なし

〈通釈〉桃の実の肌のような産毛をたたえて、少年の頬の初々しさよ。

〈山田〉紅潮して産毛の生えている少年の頬を、桃の実の肌の質感になぞらえている。少年の肌の若々しさへの愛情がみえる歌である。

〈田中〉のち、大正二年二月十三日の曙会で「ふくらめる桃の蕾のふくよかさ頬にもつ君の愛くるしさよ」という歌も発表された（「心の花」十七巻三号（大正二年三月）曙会記事 兼題「針」「網」「圓」。「少年」から「君」へと発想を変えることで、相聞歌ふうにならされている。

* 257・金魚草にトンボとまりて金の眼を日にまはす時ドンのとゞろく

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」

・金魚草にトンボとまりて金の眼を日にまはす時ドンのとゞろく

〈通釈〉金魚草にトンボがとまり、金色の目を日の光にまわす時にドンと大砲の音がとゞろく。

〈山田〉金魚草は金魚のような赤い花が特徴。「金魚草」と「金の眼」、「トンボ」と「ドン」と、「頭の韻を踏んでいる。「ドン」は正午の合図に鳴らす大砲の音で、正式には「午砲」と呼ばれる。皇居の旧本丸で鳴らしていた「丸の内のドン」がその代名詞とされ、この歌のドンもやはり「丸の内のドン」と推測できる。

〈田中〉「金魚草」は夏の季語。江戸時代に渡来した外来種。午砲の「ドン」を活かした音遊びの歌ではあるが、リズムが心地良い。

258・真昼野に昼顔咲けりまじく^{ママ}と待つものもなき昼顔の花

【初出】「白樺」三巻七号（明治四十五年七月）「草」

・真昼野に昼顔咲けりまじく^{ママ}と待つものもなき昼顔の花

〈通釈〉真昼の野に昼顔が咲く。まじまじと待つものもない昼顔の花よ。

〈山田〉昼顔は、朝顔の仲間であるが昼になっても花が咲き続けていることからその名がある。昼でもまだ咲き続けている姿を誰も待つこともなく過^{ママ}こしている人間になぞらえている。

〈田中〉「昼」の字を三つも用い、前の歌のようにユーモラスな発想を取り入れている。

259・あつき日を幾日も吸ひてつゆ甘く葡萄の熟す深き夏かな

【初出】「白樺」三巻七号(明治四十五年七月)「草」

・あつき日を幾日も吸ひてつゆ甘く葡萄の熟す深き夏かな

および、「心の花」十六巻七号(明治四十五年七月)「六月の曙会」兼題「日」「色」「草」明治四十五年六月十三日

・あつき日を幾日も吸ひてつゆ甘く葡萄の熟す八月

〈通釈〉熱い日差しを何日も吸って、つゆも甘くなり葡萄が熟してゆく深い夏である。

〈山田〉葡萄が熟し、つゆも甘く育ってゆく盛夏を詠んだ歌。収穫の秋の近づきを予感している。

〈田中〉この六月の曙会で、利玄は幹事であった。兼題「日」を詠ったものさが、会では「つゆ甘く」をめぐるいくつか批評が寄せられ、佐佐木信綱が「紫に」とか「碧玉と」とかせめてはその色つやでも述べた方がよかつたであらうに」と評していた。

「紐」

*260・結べども桃いろにならぬ愁うれひかなくれなるの紐白妙の紐

【初出】「心の花」十三巻十一号(明治四十二年十一月)「曙会記事」兼題「結」「引」明治四十二年十月十四日

・結べども桃いろにならぬ愁かなくれなるの紐白妙の紐

のち、「白樺」一巻一号(明治四十三年四月)「紐」

・むすべども桃いろにならぬ愁かなくれなるの紐白妙の紐

〈通釈〉結んでも桃色にならない愁いの気持ちだ。紅の紐と、白妙の紐と。

〈山田〉紅の紐と白い紐を合わせても、その混ざった色である桃色にはならないという発想から、男女の恋愛のままな

らなさを表現している。明治三十年頃から油絵具の西洋からの輸入が盛んになっていたために、利玄は赤と白を混ぜると桃色となるという知識を得ていたと思われる。

〈田中〉曙会は、明治四十二年十月十四日に開催された。紅と白の紐を合わせても、中間色の「桃色」にならない、というシンプルな発想だが、男女の心の機微を託しているようでもある。

261・紅薔薇見し眼を移す百合のそのうす青さ君が頬に見る

【初出】「白樺」一卷九号（明治四十三年十二月）「鈴」異同なし

〈通釈〉紅薔薇を見た目を百合へと移したときに感じた、そのうす青さを君の頬に見る。

〈山田〉鮮やかな赤い薔薇を見た直後に百合を見ると、白いはずの花がうす青く錯覚して見えた。そのときのうす青さのようなものが、普段は色白な君の頬にも見えた。目の錯覚を主題に取り入れた点は斬新な歌といえる。紅薔薇は派手できらびやかな女性、百合は地味で慎ましやかな女性の象徴とも解釈できる。

〈田中〉初出では、この後に「相去る事五歩は四歩より遠くして別れの道に霧の冷たさ」（歌集未収録）とあり、女性との別れをほのめかすものとなっている。けっして「紅」のままではいられない「君」との恋という物語性を帯びている。

262・如月や電車に遠き山の手からたち垣に三十三才鳴く

【初出】「白樺」一卷九号（明治四十三年十二月）「鈴」

・如月や電車に遠き山の手からたち垣に三十三才鳴く

のち、「心の花」十六卷二号（明治四十五年二月一日）「曙会記事」兼題不明 明治四十五年一月十四日

・如月や電車に遠き山の手のからたち垣に三十三才鳴く

〈通釈〉二月よ。電車から遠い山の手のからたちの垣にミソサザイが鳴いている。

〈山田〉山の手は26の歌にも出てきた通り、利玄にとっては身近な地域である。ミソサザイは留鳥で、澄んだ高音の鳴き声は広く知られている。秋から春先にかけて、繁殖期の一部の個体が平地に降りて越冬するため、この歌のミソサザイもそのようにして山の手へ降りてきた個体だった可能性がある。山の手は電車の線路から遠いがゆえに町中にまだまだ小鳥が住んでいるのだろう。

〈田中〉「曙会記事」では、この歌に対して佐佐木信綱が、「毒葉や一枚の葉書やむつかしい歌、銀時計のやさしさうでむつかしい歌、それもよいが、又こんな自然率直な叙景の歌も、短歌としては取つてよいと思ふ」と評していた。

* 263・宿^{やど}の山蜜柑ならびて黄なる実の朝日受け取る枝葉^{えだは}の中に

【初出】「白樺」三巻五号（明治四十五年五月）「夕方に」

・宿^{やど}の山蜜柑ならびて黄なる実の朝日受け取るいと幸に

〈通釈〉宿をとった山に蜜柑がならんでいて、黄色い実が枝葉の中に朝日を受け取っている。

〈山田〉旅先の山に蜜柑の木が植えられていて、枝葉の中に朝日を受け取るように黄色い実になっている。蜜柑の実に擬人法を使った歌である。

〈田中〉のちに利玄を代表する「蜜柑」の歌「街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る」（『紅玉』大正八年）が生まれることとなるが、これはまだ前哨戦。初出の結句を変えたことで、黄色と枝葉の緑とがより強調されることとなった。

* 264・菜の花の黄色小雨にとけあひてほのににじめる昼のあかるみ

【初出】「白樺」三卷七号（明治四十五年七月）「草」 異同なし

〈通釈〉菜の花の黄色が小雨にとけあつて、ほのかににじんでいる昼の明るさである。

〈山田〉黄色い菜の花が小雨を浴びているさまを、黄色と雨が溶け合い、昼の明るい光のなかにかすかににじんでいるとみている。光を実体的に描いており、印象派絵画のような歌である。

〈田中〉色彩語彙と気象語彙を用い、ひらがなの多用が視覚的にも印象に残る歌。

265・二階より君とならびて肩ふれて見下す庭のヒヤシンスかな

【初出】「白樺」三卷七号（明治四十五年七月）「草」

・二階より君とならびて肩ふれて見下す庭のヒヤシンスかな

〈通釈〉二階から君とならんで肩をふれさせながら、見下ろす庭のヒヤシンスよ。

〈山田〉ヒヤシンスは春の季語で、日本では幕末から栽培されていた。肩を触れさせ合いながら並んで庭の花を見下ろすという、愛情のあふれる相聞歌である。

〈田中〉初出では前の264の前に置かれていた。この二首は歌集収録時に他の「草」の作品から離れて置かれており、歌集構成が練られていたことがうかがえる。

266・舞ひ終へて扇を前に会釈する舞妓が肩の息なつかしむ

【初出】「白樺」一卷一号（明治四十三年四月）「紐」 異同なし

〈通釈〉舞い終わって扇を前にして会釈する舞妓の、肩でする息をなつかしんでいる。

〈山田〉京都の舞妓に取材した歌。舞そのものではなく、それが終わったあとの仕草と、踊り疲れて肩で息をするわずかな人間臭さに惹かれている。

〈田中〉初出次号の「鈴」に、八首の「京都の歌」があるが、歌集未収録。その一連と直接関わらないかもしれないが、明治四十一年に志賀直哉、山内英夫(里見淳)と関西旅行をした折の共同日記(「旅中日記 寺の瓦」「海」一九七〇年二月号 中央公論社)に、山内によるこんな記述があった。「円山公園で木ノ君がヒズリ相な長い袖をたらしした友禪模様のに見返られたと云ふてニコニコして居られた」。京都の旅で、「舞妓」の美しさに惹かれたのだろう。

267・灰いろに埃か、れるかなめ垣うるほふ雨に矢来を通る

【初出】「白樺」一卷九号(明治四十三年十二月)「鈴」

・灰色に埃か、れるかなめ垣うるほふ雨に矢来を通る

〈通釈〉灰色に埃がかっているカナメモチの生垣よ。うるおいの雨が矢来を通っている。

〈山田〉かなめ垣とは赤い葉が特徴的なカナメモチの生垣のこと。矢来とは竹・木を粗く組んだ仮の囲いのこと。しばらく雨がなく埃がかかっていた生垣に、その埃を洗い流すかのように雨が降ってきたさまを詠んでいる。

〈田中〉「かなめ垣」は、バラ科のカナメモチで作った生け垣で、赤い色が美しい。利玄の郷里、岡山県にもよく見られるという。灰色と、本来の赤そして葉の緑という色彩を対比させた作。

268・汽船に居て湊の町のわか葉見る陸にも海にも昼の日光

【初出】「白樺」一卷一号(明治四十三年四月)「紐」

・汽船に居て湊の町のわか葉見る陸にも海にも昼の日光

〈通釈〉汽船の中から港の町の若葉を見ている。陸にも海にも昼の日が光っている。

〈山田〉海上から陸上を見渡し、両方に等しく降りそそぐ日差しに着目している。四句目が四四調になっていることが特徴である。

〈田中〉川田（1935）で、101、108、167、171歌と同じくこの歌も四四調の一首として挙げられている。第四句「陸にも／海にも」が四四調となっている。「湊の町」をどことは特定できないが、陽光が陸にも海にも降り注ぐさまと、次の歌との対比がおもしろい。

* 269・海荒る、前の沈黙雲おもく島山よもぎにほひながる、

【初出】「心の花」十四卷三号（明治四十三年三月）「曙会記事」兼題「荒」「猫」明治四十三年二月十四日

・海ある、前の沈黙雲おもく島山草のほひ流る、

のち、「白樺」一卷一号（明治四十三年四月）「紐」

・海荒る、前の沈黙雲おもく島山よもぎにほひ流る、

〈評釈〉海が荒れる前の沈黙よ。雲が重くたれこめ、島に山よもぎの匂いが流れる。

〈山田〉雲が重くたれこめ、山よもぎの匂いに満ちているという状況を海が荒れる前兆と見ている。静けさの表現のためには香りを使っているところが特徴的。

〈田中〉歌会兼題「荒」の歌であり、本格的に海が荒れる前の徴候として、草が匂い立っているようだ。ただの「草」ではなく、より芳香の高い「よもぎ」に変えたことが功を奏している。

270・水引の根をあらひ行く野の水の淀みにうつる秋の夕映はえ

【初出】「心の花」十四卷十一号（明治四十三年十一月）「曙会記事」 兼題「薄」「泡」 明治四十三年十月十三日

のち、「白樺」一卷九号（明治四十三年十二月）「鈴」
・水引の根を洗ひゆく野の水の水泡ゆはほえにうつる秋の夕映

〈通釈〉水引の根を洗つてゆく野の水の淀みに、秋の夕映えがうつつていゝ。
・水引の根をあらひ行く野の水の淀みにうつる秋の夕映

〈山田〉ミズヒキは八十月に花が咲くタデ科の植物で、秋の季語となつていゝ。林の中に生えるミズヒキの根元を小さな沢が流れ、その淀みにうつる秋の夕映えへと視点を移していゝ。

〈田中〉もともとは歌会兼題「泡」で作られたが、推敲して「水の淀み」となつた。「水引の花」は秋の季語。白い花のことを「銀水引」と呼ぶので、歌集題『銀』にもふさわしい歌となつていゝ。

「あかり」

*271・母は子に思ひ絶えよとさとしけりその夜の月は二人てらしぬ

【初出】「心の花」十一卷二号（明治四十年二月）「小萩」

のち、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」
・母は子におもひたえよとさとしけりその夜の月は二人てらしぬ

〈通釈〉母は子どもに向かつて諦めろとさとした。その夜の月は二人を照らしてゐた。
・母は子に思ひ絶えよとさとしけり其夜の月は二人てらしぬ

〈山田〉「思ひ絶えよ」の語からは小倉百人一首の「今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな」

（左京大夫道雅）を想起させる。母は子のためを思って何かを諦めるよう諭したのだろうが、何を諦めさせようとしているのかわからない。この後に恋の歌が続くこともあり、母の反対を受ける恋愛であった可能性もある。

〈田中〉川田（1957）に、この歌の鑑賞文がある。「結句の『二人』を母子としたのだが、或はそうでなく、恋人同士の二人なのかも知れぬ。いずれにしても、哀れで、美しく、又、小説めいた趣もある。利玄は、この種の歌を滅多に作らなかった」（四二―四三頁）。272歌のように、利玄の語彙に「恋」が出て来る時期でもあり、恋人の「二人」とする説もはずれではないだろう。

* 272・恋ゆゑに人をあやめしたをや女の墓ある寺の紅梅の花

【初出】「心の花」十一巻二号（明治四十年二月）「小萩」

・恋故に人をあやめしたをや女の墓ある寺の紅梅のはな

〈通釈〉恋のために人を殺したという女性の墓がある寺の紅梅の花よ。

〈山田〉恋心ゆゑに罪を犯してしまう女性の史実は多く残されているが、特に有名な「八百屋お七」は放火、「白子屋お熊」は殺人未遂なので、この歌に詠まれた「たをや女」が誰を指すのかはわからない。墓所に咲く紅梅の花に、行き過ぎてしまった恋心への共感と同情心が象徴されている。

〈田中〉紅野敏郎「木下利玄日記（新資料）上」（『文学』一九八二年九月号 以下、紅野（1982a）とする）によると、明治四十年の利玄の日記には、「恋」の語が度々書かれていた。八月二十二日は、志賀直哉が泊まりに来て、「蚊張の中で二人の恋を語りあひ吾々はどうすればよいかを話合ふ」。八月二十三日には利玄が志賀の家に行き、「僕の恋についていろいろはなす」。九月四日は「田村文学士」（田村寛貞。その父は陸軍参謀であった）を訪れ、「新旧思想の衝突問題より話はす、み志賀の事を語り、自分の恋もうちあける」とある。明治四十年には利玄が恋の問題に悩んでいたことが

うかがえる。

(三八)

* 273・をんな坂袖もつれあふ舞姫がかすみに濡る、朝詣かな

【初出】「心の花」十二巻四号(明治四十一年四月)「鈴葉すゞしろ」

・おんな坂袖もつれあふまひ姫がかすみに濡る、朝詣あさもちかな

〈通釈〉女坂で袖がもつれあふ舞姫たちが、かすみに濡れている朝詣よ。

〈山田〉女性でも歩けるゆるやかな坂を女坂、厳しい坂を男坂と呼ぶ例が全国の参道にみられる。これは築地西本願寺の参道であるようだが、そこを朝霞に濡れながら歩く舞妓たちのあでやかな姿を描いている。なお森鷗外の『舞姫』はこの歌の初出の十八年前に発表された。

〈田中〉初出では、この三首前に「築地西本願寺」と添え書きがあるが、特定の場所よりも、ゆるやかな「をんな坂」を「舞姫」と呼ばれる女性たちが歩く美しさに主眼があるのだろう。

274・顔と顔よせて行燈の絵を見るや桜にほふうすあかり哉

【初出】「心の花」十二巻一号(明治四十一年一月)「初芝居」(木下小青の名で)

・顔と顔よせて行燈の絵を見るや月は二人の帯に袂に

のちに、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」

・顔と顔よせて行燈の絵を見るや桜に匂ふうすあかり哉

〈通釈〉顔と顔を寄せて行燈の絵を見ていたら、桜の花が匂う薄明かりだね。

〈山田〉恋人と二人で顔を寄せ合いながら行燈の絵を見ていたら、行燈の薄明かりの中に桜の花の香りが舞い込んでき

た。絵行灯は縁日や祭りのときに飾られるもので、恋人と春の祭りに出かけた思い出を描いた相聞歌。

〈山田〉初出は情報量が多く、もたもたした調べであったのに対し、『玉琴』での改作はすっきりとした印象。歌集ではひらがなを増やして、よりしっとりとした余韻ももたらしめている。

* 275・物かげに怖おぢし目高めだがのにげさまにさ、濁りする春の水哉

【初出】「心の花」十一巻二号（明治四十年二月）「小菘」

・物かげにおぢしめだかのにげさまにさ、濁りする春の水哉

〈通釈〉物陰で怯えているメダカが逃げ惑い、少しばかり濁る春の水よ。

〈山田〉物陰で身を潜ませて外敵に怯えるメダカという小さな生き物に優しい視線を注いでいる歌。「ささ濁り」は現在でももっぱら釣り人の間で使われることがある言葉。

〈田中〉初出では、この後の「さすらひし心のすみかもとめ得てあふぐさやけき月の光や」以下十八首（ほか、285・286の二首は収録されている）は歌集未収録。みずからの決められた運命から逃げられない利玄ゆえ、「目高のにげさま」に感じ入るものがあつたのだろう。

276・風絶えてくもる真昼をものうげに虻なく畑のそら豆の花

【初出】竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」 異同なし

〈通釈〉風が絶えて曇る真昼に、ものうげに虻が鳴いている畑のそら豆の花よ。

〈山田〉陰鬱とした農村風景を描いた歌、虻は鳴き声を出さないの、羽音のことを「なく」と表現していると思われる。いったん聴覚を表現した後には再び小さいところへズームアップしてゆく手法を用いている。

〈田中〉紅野敏郎「木下利玄日記(新資料)下」(「文学」一九八二年十月号 以下、紅野(1982b)とする)によると、利玄の明治四十一年二月二十日付の日記に、「鬱金香」についての記述がある。「佐々木さんへ伺つて鬱金香五十二首をさし出し又三首を加へ中五首はぬいてもよいと云つて帰りに駿河台の平田松堂を訪問してしばらく歌の話をして沙鷗に電話」。平田松堂は日本画家で「心の花」にも出詠。沙鷗は正親町公和のこと。なお、佐佐木信綱編・竹柏園撰集『玉琴』はその年の四月に春陽堂から発刊され、利玄の「鬱金香」は最終的に五十三首が掲載された。

277・空もやう気にしてもどる 嫂あじよめに門の桃散る雨ふくむ風

【初出】竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」

・空もやう気にして戻る 嫂あじよめに門の桃散る雨ふくむ風

のち、「心の花」十二巻五号(明治四十一年五月)「曙会三月会記事」 兼題不明 明治四十一年三月十三日

・空模様くもよう気にしてもどる 兄嫁あによめに門の桃ちる風暖かう

〈通釈〉空模様を気にして戻る兄嫁に、門の桃の花が散るほどの雨を含む風が吹き付けている。

〈山田〉雨が降りそうな空模様を気にして外出先から戻ってきた兄嫁に、雨を含む強い風が吹き付けるさまを描いている。家族ではあるものや距離感のある兄嫁という存在だからこそ少し突き放した表現である。

〈田中〉なお、この明治四十一年三月二十六日から四月十日まで、利玄は志賀直哉、山内英夫(里見弴)とともに関西を旅し、共同で日記をつけた。その「旅中日記 寺の瓦」(「海」一九七〇年二月号 中央公論社)の一部を読むと、利玄が「ふんどしのたるみ工合や春の風」など句作にも昂じていたことがうかがえる。

278・ぬなは蓴菜生ふる池をめぐりて奥庭のほしち祠見に行く昼の雨かな

【初出】「心の花」十二巻四号（明治四十一年四月）「鈴菜すゞしろ」

・ぬなは蓴菜生ふる池をめぐりて奥庭のほしち祠見に行くひるの雨かな

また、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」異同なし

〈通釈〉ジュンサイの生える池をめぐって奥庭の祠を見に行く昼に降り出す雨よ。

〈山田〉蓴菜とはジュンサイのこと。水面に浮かぶ水草で、若芽を食用とし、ぬるぬるした食感で知られる。一首全体
でみても、ジュンサイのぬるぬるしたイメージが歌の世界観を覆っている。

〈田中〉「心の花」十巻八号（明治三十九年八月）の無題四首に、この歌の原型と思われる歌がある「ぬなは生ふる小
さき池のきしをめぐり僧がみちびく資朝の墓」。この歌は、同年六月から七月、徳川慶久、志賀直哉らと会津から新潟、
佐渡をめぐる旅で生まれたもの。日野資朝すけともは、後醍醐天皇の重臣だったが、鎌倉幕府転覆をはかったとされ、佐渡に送
られ斬首された。墓は佐渡ヶ島の妙宣寺境内にあるという。この原歌を、固有名詞から離れて普遍化させたのが掲出歌
であるう。

279・水ぐるま近きひゞきに少しゆれ少しゆれある小手鞠の花

【初出】竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」

・水ぐるま近きひゞきに少しゆれ少しゆれめく小手鞠の花

〈通釈〉水車が近くにある響きに少し揺れ続けている小手鞠の花よ。

〈山田〉水車の音と、そのそばで少し揺れる小手鞠の花を描いている。推敲の結果「少しゆれ」のリフレインを取り入
れており、利玄には珍しい改作の仕方になっている。

〈田中〉「小手毬の花」は春の季語。水車の、どこか牧歌的な音とともに、少し揺れる可憐な花との取り合わせが快い。

* 280・うす曇遠がみなりをきく野辺の小草がなかの昼顔の花

【初出】「心の花」十二巻四号(明治四十一年四月)「鈴菜すゞしろ」

・うす曇り遠いかづちをきく野辺の小草がなかの昼顔の花

また、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」

・うす曇遠いかづちをきく野辺の小草がなかの昼顔の花

〈通釈〉薄曇りのなか遠い雷鳴をきいている、野辺の小さな草の中の昼顔の花。

〈山田〉遠雷のきこえる曇り空の下で、野辺に咲いている昼顔の花を擬人化している。

〈田中〉菱川(1973)補注二七四に、興味深い逸話が記されている。それによると、利玄は結婚前の若いころに「昼顔に遠がみなりを聞く野かな」という句を作ったことがあったという。それを下地にしたこの歌であろうが、短歌の調べとしては「遠がみなり」よりも「遠いかづち」の方が据わりがよいだろうか。

281・川風に堤の野菊花ゆれてさむき朝なり鳩鳥にほとりのなく(明治四十一年十月利根川に遊ぶ四首)

【初出】「心の花」十二巻十一号(明治四十一年十一月)「夜寒」

・川風に堤の野菊花ゆれてさむき朝なり鳩鳥にほとりのなく()の表記なし

〈通釈〉堤の野菊の花が川風にゆれて寒い朝である。鳩鳥が鳴いている。

〈山田〉鳩鳥は別名カイツブリ。ゆるやかな河川や湖沼にいる水鳥として身近な存在である。四句切れで、秋の寒い朝に川風にゆれる野菊の花の印象を断ち切るようにカイツブリの鳴き声が聞こえてくる。

〈田中〉281、284は、明治四十一年十月四日に、竹柏会野遊会で大利根べりに遊んだ折の四首である。初出にはその紀行文も書かれており、まず、上野駅で六時五十分発の汽車に乗り遅れたシーンから始まる。成田駅で、無事佐佐木信綱と石樽千亦に合流でき、同人たちと印旛沼方面へ。その沼では、数年前に若い夫婦（男二十二、女十七）が真孤狩りに舟を出し、水難に遭って命を落とした話が記されている。この「鴉鳥」は、その若い夫婦の化身ではないか、という利玄の浪漫的な発想と重ね合わされている。

282・網に入る鮭のうろこにうそ寒う夕日ひかりぬ船の秋風

【初出】「心の花」十二卷十一号（明治四十一年十一月）「夜寒」

・網に入る鮭のうろこにうそ寒う夕日光りぬ船の秋風

〈通釈〉網に入る鮭のうろこにうすら寒く夕日が光った。船に秋風が吹く。

〈山田〉鮭の網漁の情景を描いた歌。うろこに夕日が反射するさまにうすら寒さを感じたのは、都会っ子利玄が漁に対して野蛮な印象を受けたからかもしれない。

〈田中〉午後三時、印旛沼辺りで舟に乗り、「鮭網見物」をした。川上では花火があがっていたが、その花火の由来として、「矢口と龍の台の二村が、水利の事での十年の確執がとけて、今日そのお祝いに揚げて居る」という歴史的な解説もなされている。夕方、鮭が網にかかった。その大きな鮭の頭を棒で「叩き殺す」と書かれているが、実際に利玄が目にしたのかは定かではない。

283・月さむき夜頃となりぬ蘆の穂のしろき堤のこほろぎの声

【初出】「心の花」十二卷十一号（明治四十一年十一月）「夜寒」

・月寒き夜頃となりぬ葦の穂の白き堤のこほろぎの声

〈通釈〉月の寒い夜となった。アシの穂が白く実る堤にコオロギの音がする。

〈山田〉アシは秋になると白い穂綿をつけるようになる。その中からコオロギの声も聞こえ、秋の訪れを強く感じている。

〈山中〉印旛沼の付近は「葦のみ茂つて、その白い穂が秋陰の日の午後をそよぎもせずにくらぶれて居る」。そのまま夜に入り、「こほろぎの声」が聞こえてきたのだろう。

284・一村の夢おだやかに月ふけて小草の露に虫の音ぞすむ

【初出】「心の花」十二卷十一号（明治四十一年十一月）「夜寒」

・一村の夢おだやかに月ふけて小草の露に虫の音ぞすむ

〈通釈〉一つの村の夢は、おだやかに月夜のふけて、草の露には虫の鳴き声が澄んでいる。

〈山田〉田舎村の秋の夜の風景を描いた歌。おだやかで静謐な歌であるが幻想性もある。

〈山中〉「鮭とり船の親分」が、佐佐木信綱に歌を所望。船唄がゆるく聞こえる中、鮭網の見物から帰ると、「船の夜寒が身にしてみても、皆肌寒の襟をかき合せる、岸にいたら汀の家の灯が水にゆらいで叢に虫の音がしげかった」。そんな寒さを経て、湯につかり、同人の家で身体を休めての感想だろう。

なお、佐佐木信綱と志賀直哉との対談で、この大利根の旅のことを回想し、「竹柏会では、春秋に日帰りの野遊会を催しました。木下君はいつも来ましたが、旅行といふては利根川に鮭をとるために二晩泊りで行つただけです」（「短歌研究」昭和二十九年四月号）と、二泊の旅であったことを述べている。

285・家ごとに引窓つけてあかりとる竹の山崎藪のうへの月

【初出】「心の花」十一巻二号（明治四十年二月）「小萩」

・家毎に引窓つけてあかりとる竹の山崎藪の上の月

のち、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」異同なし

〈通釈〉家ごとに引窓をつけて明かりをとる竹の山崎。藪の上には月が出ている。

〈山田〉歌舞伎「双蝶々曲輪日記」の第七段を通称「引窓」といい、そのイメージを背景としていいと思われる。

〈田中〉実景歌であるうが、歌舞伎をよく見ていた利玄ゆえ、歌舞伎の「引窓」などを連想していいのかもしれない。

初出ではこの四首後に、「をとめらがおもひおもひと品定め芝居帰りの朧夜の道」（歌集未収録）もある。

286・うしろつきもしやと思ひおもふ間に傘遠ざかるたそがれの雪

【初出】「心の花」十一巻二号（明治四十年二月）「小萩」異同なし

のち、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」

・うしろつきもしやと思ひおもふ間に傘遠ざかるたそがれの雪

〈通釈〉後ろ姿にもしやと思うと、思っている間に、たそがれの雪のなかを傘が遠ざかってゆく。

〈山田〉「もしや」と思ったのは後ろについてくる人が知った顔かもしれないからだろう。しかし実際はそうではなく、

思っている間に追い抜かれて傘は雪のなかを遠ざかってゆく。珍しくリフレインの入っている歌である。

〈田中〉初出では、この前に「八百屋お七」という説明つきの、「とげぬくと四つの袂はよりそひぬぐれ寺の紅梅の花」の歌がある。そういう芝居がかった物語性で鑑賞することもできるだろう。見覚えのある後ろ姿に心が揺れるが、いるしか雪の世界に遠ざかってゆく、幻想的な場面である。

「八つ口」

287・うす雪は小雨にとけてうぐひすのさ、なきをきく藪かげの道

【初出】「学習院輔仁会雑誌」五十七号（明治三十五年三月）「折にふれたる歌十五章」

・うす雪は小雨にとけて鶯のさ、なきさむきやぶかげのみち

のち、「心の花」十卷三号（明治三十九年三月）（無題）

・うす雪は小雨にとけてうぐひすのさ、鳴さむき藪かげの道

また、竹柏園選集『あけぼの』明治三十九年六月「春雨小傘」

・うす雪は小雨にとけてうぐひすのさ、なき寒き藪かげの道

〈通釈〉薄雪は小雨にとけて、うぐいすの笹鳴きを聞く藪かげの道である。

〈山田〉小雨交じりの雪のなか、少し早いうぐいすが出てきて鳴いている様子を描いた初春の歌。笹鳴きとはうぐいす

が舌鼓を打つようにチチと鳴くさま。

〈田中〉吉田俊彦「木下利玄（二）——習作期の感性——」（岡山大学文学部言語国語国文学会「岡大國文論稿」十六号

一九八八年三月 以下「吉田1988」と略す）では、この歌から連想される先人の作として、金子薫園『かたわれ月』（明

治三十四年）の巻頭歌「あけがたのそぞろありきにうぐひすの初音ききたり藪かげの道」を挙げている。利玄にとって

も大切な一首だったようで、四句目を書き換え続けるなど、みずから添削をほどこしている。

288・春の雪をんなの人の八つ口の傘をこぼれて匂ふみちわる

【初出】「心の花」十卷三号（明治三十九年三月）（無題）

・蛇の目傘半つぼめて行く人の八つ口ハツグチにはふ春のあわ雪

〔通釈〕春の雪が、八つ口を着た女の人がさしている傘からこぼれて、道のぬかるみを匂わせている。

〔山田〕八つ口とは女性用の着物の、脇のあいた部分。みちわるは「道悪」でぬかるんだ歩きづらい場所。初春の風景を、女性を主題になまめかしく詠もうとしている。助詞がどこにかかってゆくのかわかりづらくなっており、初期作品らしい未熟な習作ともいえる。

〔田中〕初期作品で「八つ口」「傘」「春の雪」の取り合わせたものとして、「心の花」収載十首詠の中に右の一首があった。やわらかい春の雪なので、傘からこぼれて女性の着物の「八つ口」に入り込んでしまうという官能的な想像力だろう。結句の「みちわる」は、『銀』刊行直前の「白樺」五巻四号（大正三年四月）の十四首詠の題にもなっており、「ころもち足駄の齒をすふみちわるを心なごみて雨降りに行く」という歌もある。

289・いもうとの小さき歩みいそがせて千代紙かひに行く月夜かな

〔初出〕「学習院輔仁会雑誌」六十八号（明治三十九年三月）「南圓堂」（里泉の名で）

・妹の小さき歩みいそがせて紅かひに行くうす月夜かな

のち、竹柏園選集『あけぼの』明治三十九年六月「春雨小傘」

・いもうとの小さき歩みいそがせて紅かひに行くうす月夜かな

〔通釈〕妹の小さな歩みを急がせながら、千代紙を買いに行く月夜である。

〔山田〕月が出る夜にまだ小さな妹を連れ、その歩みを急がせながら妹のために千代紙を買いに行く。千代紙は折り紙や紙人形に使われる伝統的な玩具。幼い妹のいきいきとしたさまを捉えており、初期作品の傑作というべき一首である。利玄の十三歳下の妹寿子のことを詠んでいると思われ、初出当時七歳である。実際は初出の通りに紅を買いに行ったのかもしれないが、女兒であることを強調するために千代紙に変更したようである。

〈田中〉前出の「吉田1983」では、この歌と金子薫園『かたわれ月』の「吾妹子と後れさきだち梅かをる町をさまよひぬおぼろ夜の月」の共通要素が述べられている(町は「野」の誤りか)が、初出と照らし合わせると、それほど共通するものが多いとは言い難いだろう。初出や『あけぼの』では、買うものが「紅」であったが、歌集では「千代紙」と、童女性を演出したところが興味深い。

(四八)

290・おくれては母のあと追ふをさな児のおさげの髪に春の風吹く

【初出】「学習院輔仁会雑誌」六十八号(明治三十九年三月)「南圓堂」(里泉の名で)

・おくれては母のあと追ふ幼な児の振り分け髪に春の風吹く

〔通釈〕歩き遅れては母のあとを追う幼い子供のお下げ髪に春の風が吹いている。

〈山田〉289同様、当時七歳の妹寿子のことを詠んだ歌と思われる。「おさげ」は明治三十二〜三十三年の日本国語大辞典に初めて出例がみられるなど、当時としては俗語に近い言い回しであった。

〈田中〉初出では童女の髪型である「振り分け髪」を用いていたが、さすがに古風だと感じたのか、「おさげの髪」と、新しい言い方に直している。俗語を取り入れたことで、より「をさな児」が活写された。

* 291・二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり菜の花のみち

【初出】「心の花」九卷三号(明治三十八年三月)「春雨小傘」

・二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり菜の花の道

のち、竹柏園選集『あけぼの』明治三十九年六月「春雨小傘」

・二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり菜の花のみち

〈通釈〉 菜の花咲く道をゆく二人には、春雨を防ぐには傘が小さすぎて、たもとが濡れてしまった。

〈山田〉 相合い傘を題材とした相聞歌で、「春雨小傘」の調子など俗謡調の軽みがみられる。

〈田中〉 紅野敏郎「日露戦争と木下利玄（下）」（「短歌」一九八二年五月号）によると、明治三十八年三月二日の利玄の日記にこの初出に関する記述がある。「心の華第三来る、春雨小傘と云ふ題で自分の歌七首のつて居る」。当時は、学習院輔仁会雑誌の編集や歌作などのほか、人との交際も多い日常だった。しかし、紅野によると、日露戦争のことはほとんど日記に表れておらず、「山の手の青年は無視の姿勢でおのれの気質のままに生ききっていたのである」（二一六頁）。確かに、これらの歌を見ても、戦争の影は感じられない。

292・田舎町の料理屋の庭に桃が咲きならべてほせる番傘ひかる

【初出】 不明。五島茂『鑑賞 木下利玄の秀歌』（短歌新聞社、一九八七年）では、「明治三十八年作」として、「見透し（見透し）の田舎料理屋昼しづか桃さく庭に番傘を干す」とある（六一頁）。川田順『木下利玄』（雄鶏社、一九五七年）では、「見透し（見透し）の田舎料理屋昼しづか桃さく庭に番傘を干す」（一〇八頁）。

〈通釈〉 田舎町の料理屋の庭に桃の花が咲いていて、それと並んで干してある番傘が光っている。

〈山田〉 桃の花と並んで干してある番傘が光っているのは、雨上がりの晴れ間に反射しているからだろうか。田舎町の料理屋を舞台としたことに、利玄の故郷への郷愁がうかがえる。

〈田中〉 五島（1987）に、この歌は「明治三十八年作」であり、「後改作した。ナイイヴな作品。こういうところから出発したのだ」（六一頁）とある。改作した結果がこの「田舎町の」なのだろう。

* 293・藪かげのくろき朽葉のうづたかき流に落つる紅椿かな

【初出】「心の花」五巻五号(明治三十五年五月)「竹柏会第四親睦会」兼題「春川」

・藪かげのくろき小川のくろき瀬に散ては沈む花椿かな

のち、竹柏園選集『あけぼの』明治三十九年六月「春雨小傘」

・藪かげの暗き小川の暗き水におちては志づむ花つばきかな

〈通釈〉藪かげの黒い枯れ葉のうずたかき流れに落ちてゆく紅椿よ。

〈山田〉朽葉は朽ちた葉で、枯れ葉のこと。黒い枯れ葉の山のなかに鮮やかな紅椿が落ちてゆくコントラストと悲劇性が表現されている。

〈田中〉竹柏会の「親睦会」について、紅野(1983)に引用された日記の中にも記述がある。明治三十九年四月八日の日記に、「午后竹柏園会第九回親睦会華族会館にてあれバ之に赴く 森林太郎氏のゲルハルト、ハウプトマンにつきての話(略)次が宮内省伶人諸氏とやらの催馬楽朗詠等(略)次は手品」。文学博士らが華族会館に来会し、森鷗外の講演などを傍聴する場に、利玄は十代から同席していたことがうかがえる。

294・燕とぶ雨後の往来日陰日なたくつきりせるをよろこびとほる

【初出】不明。(五島(1987)では、「明治三十八年作」として、異同なし(六一頁)。川田(1957)でも明治三十八年作で、異同なし(一〇八頁)。

〈通釈〉燕が飛ぶ雨上がりの往来。燕は日陰と日向がくつきりしたのを喜びながら通ってゆく。

〈山田〉燕の気持ちに寄り添って詠まれた歌。「くつきり」という俗語的な擬態語を用いているのが新鮮さを演出している。

〈田中〉五島（1987）に、この歌は「明治三十八年作。芽生えのフレッシュさをおもわず」（六二頁）と評されている。

* 295・朝月は小萩の露にしづみけりあかつきやみのこほろぎの声

【初出】「心の花」十一卷二号（明治四十年二月）「小萩」 異同なし

〈通釈〉朝の月は小萩の露に沈んだ。夜明け前のコオロギの声がきこえる。

〈山田〉「あかつきやみ」は暁闇で夜明け前の闇のこと。小萩に落ちる露が朝の月を反射するさまを「しづみけり」と表現している。典型的な秋の風景を描いており平凡な歌である。

〈田中〉秋らしい「小萩」「こほろぎ」の取り合わせは月並みでもあり、題詠ふうの作である。

296・大原や野菊花咲くみちのべに京へ行く子か母と憩へる

【初出】「学習院輔仁会雑誌」六十八号（明治三十九年三月）「南圓堂」「里杲」名で

異同なし

のち、「心の花」十卷三号（明治三十九年三月）（無題）

・大原や野菊花さく道のべに京へ行く子が母と憩へる

ほかに、竹柏園選集『あけほの』明治三十九年六月「春雨小傘」 異同なし

〈通釈〉大きな野原の野菊花の花が咲く道の辺に、京へと向かう子供だろうか、母と休憩している。

〈山田〉俳句のような切れ字が導入されている歌。大原は地名ではなく単純に大きな野原の意味だろう。母ではなく母子単位でもなく、まず子供に視点を向けている点が習作の時点ですでにみられることが利玄の本質を表している。

〈田中〉紅野（1982a）によると、明治三十九年二月二日の日記にこの歌について書かれている。「昼から学校を休んで

帰り詠草に歌をした、めて(略)三時から小川町のお師匠様へ往つた 大原や野菊咲くみちののへに京へ行く子か母といこへる。(略)今日はこの四首が佳いと云はれた、猶歌は自分でうみ出すばかりでは足りない、しかし西洋の詩のやうな精い描写ハ歌には適しないが漢詩や俳句の趣味ハ入れられるよい物であらうとの事だ。学校を休んでまで作歌に打ち込む年若き利玄と、アドバイスを惜しまない佐佐木信綱との師弟関係がうかがえる。なお、竹柏会の明治三十九年「兼題」は、一月が「梅」、二月が「若草」、三月が「野」であつた。

297・野菊一むら水をおほへるいさら川さ、やき細く野は暮れにけり

【初出】竹柏園選集『あけぼの』明治三十九年六月「春雨小傘」

・野菊一むら水をおほへるいさ、川志らべ寂しく野は暮れにけり

〈通釈〉野菊の一群が水を覆っているいさら川。ささやき声は細く、野は暮れていった。

〈山田〉いさら川とは水の少ない川の意。初出の「いささ川」だと細い川となり、意味が変わってくる。初句七音の字余りは利玄としては珍しいものである。

〈田中〉初出の「いささ川」は、細い流れ、小川の意味だが、歌集の「いさら川」となると意味が異なる。「いさら川」は、古今集の「犬上」とこの山なるいさや川いさと答へよ我が名もらすな」から来たもので、さあ、どうだか知りません、と知らないふりをするときの言葉。小さな川であることは確かだろうが、歌集では、遊び心を含ませたのかもしれない。

298・落葉やく青き煙のよどみたる林をゆけば雨のおちくる

【初出】不明。『木下利玄全歌集』（岩波書店、大正十五年）には、「明治三十九年」作品として「八つ口」の題の中の一

首として収録されている（四六頁）。異同なし。

〔通釈〕落ち葉を焼く青い煙がよごんでいる林を歩いてゆけば雨が落ちて来る。

〔山田〕何かしらの行為をしているときにふと雨が落ちて来るというモチーフは利玄に頻出するが、その原型といえる歌。落ち葉を焼く煙の色を青と表現するところにみずみずしさがある。

〔田中〕初出不明だが、竹柏会入門初期の作と思われるので、参考までに入門時のことを記しておく。日笠祐二「木下利玄の竹柏会入門前後」（『学習院高等科研究紀要』四号 一九六九年十一月）は、「木下家日記」の記述から利玄の入門日を「明治三十二年十月十七日」と特定した実証的な論文であり、その時に納めた入門料（束脩金）が壹円、月謝も壹円であったことが記されている。明治三十二年当時、雑誌「中央公論」が十二銭であり、それが八冊くらい買える月謝の額であったことがわかる。

299・時雨降り早仕舞せる宵町のくゞり障子のともし灯の色

〔初出〕不明。『木下利玄全歌集』（岩波書店、大正十五年）には、「明治三十九年」作品として「八つ口」の題の中の一首として収録されている（四五頁）。異同なし。

〔通釈〕時雨が降って早仕舞いする夜の街の、くゞり障子の灯火の色よ。

〔山田〕「宵町」は歓楽街などの類であろう。俗世といえる街に視線を注ぐ利玄の性格が、すでにこの頃よりあらわれている。

〔田中〕「障子」を歌った初期の習作に、「障子しめて書かたづくる秋の日に落つる栗の実音しづかなり」（『学習院輔仁会雑誌』六十一号・明治三十六年十一月二十六日）がある。当時利玄は十七歳。高等科一年で、同誌編集部委員に就いた折の号の作品である。同じ「障子」という語を用いながらも、「宵町のくゞり障子」とは趣が異なるところが興味深い。

以上、本紀要第五十五号(二〇一三年八月)、第五十六号(二〇一四年三月)と、今号の三回にわたって、木下利玄の第一歌集『銀』初版本の全歌を評釈してきた。前二回掲載ののち、四年ほど月日が経ってしまったが、その間に共同執筆者である山田航は、本学大学院文学研究科修士課程を修了した。一首一首を丁寧の評釈するという地道な作業が、研究者にとつて欠かせない基礎作業であることを実感できたことと思う。

さて、これらの作業を通して検証したかったことは、逆年順に編まれた初版本『銀』の編集意図である。今日流通する『定本 木下利玄全集』(臨川書店、一九七七年)などは、編者により、歌順が編年体直されていた。しかしながら、木下利玄はあえてこの第一歌集を逆年順に編み、岩手一の関の旅情に始まり、学習院高等科の卒業年である明治三十九年作品へと、精神的な遡航を試みていたのである。二九九首という、一見半端な数値に思われる収録歌数も、残りの一首はつねに〈現在の自分〉が補完するものと意識されていたとすると、利玄ならではの構成意識、編集の意図が伝わってくる。

最後に、全首の初出を調査した本研究の成果の一つとして、『木下利玄集』『日本近代文学大系55 近代短歌集』(角川書店、一九七三年)の初出情報の誤り等を以下に記しておきたい。
(田中 綾)

* 174・あすなるの高き梢を風わたるわれは涙の目をしばた、く

【初出】「白樺」四巻八号(大正二年八月)「利公の爲めに」 異同なし

↓異同「あり」・あすなるの高き梢を風渡るわれは涙の目をしばた、く

* 218・恐ろしき黒雲を背に黄に光る向日葵の花見ればなつかしひまはり

【初出】「白樺」三卷八号（大正元年八月）「指（夏）」

・恐しき黒雲を背に黄に光る向日葵の花見ればなつかし

↓補足 および、「心の花」十六卷八号（大正元年八月）「曙会記事」 兼題「忘」「黄」「如」 明治四十五年七月十三日

・恐しき黒雲を背に黄に光る向日葵の花見ればなつかし

* 233・夏来れば築地の朝の好もしさ海の風吹く凌霄花この

↓初出が誤り ↓【初出】「心の花」十六卷四月（明治四十五年四月）「曙会記事」 兼題「築」「町」「重」おもし 明治四十五

年三月十三日

・夏来れば築地の朝の好ましさ海の風吹く凌霄花

↓のち、「白樺」三卷五号（明治四十五年五月）「夕方に」

・夏来れば築地の朝の好もしさ海の風吹く凌霄花のうぜんかつら

* 250・象の肌のけうとさおもふ椿の木枝さき重き花のかたまり

【初出】「白樺」三卷五号（明治四十五年四月）「夕方に」

↓初出情報が誤り ↓【初出】「白樺」三卷五号（明治四十五年五月）「夕方に」

* 256・桃の実の肌のやうなるうぶ毛して少年の頬のうひくしきよ

【初出】「白樺」三卷九号(大正元年九月)「夏の末」

↓初出が誤り ↓【初出】「白樺」三卷七号(明治四十五年七月)「草」異同なし

* 260・結べども桃いろにならぬ愁うれひかなくれなるの紐白妙の紐

↓初出が誤り ↓【初出】「心の花」十三卷十一号(明治四十二年十一月)「曙会記事」兼題「結」「引」明治四十二年十月十四日

・結べども桃色うれひにならぬ愁かなくれなるの紐白妙の紐

↓のち、「白樺」一卷一号(明治四十二年四月)「紐」

・むすべども桃色うれひにならぬ愁かなくれなるの紐白妙の紐

* 271・母は子に思ひ絶えよとさとしけりその夜の月は二人でらしぬ

【初出】「心の花」十一卷二号(明治四十年二月)「小菝」

・母は子におもひたえよとさとしけりその夜の月は二人でらしぬ

↓補足 のち、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」

・母は子に思ひ絶えよとさとしけり其夜の月は二人でらしぬ

* 280・うす曇遠がみなりをきく野辺の小草がなかの昼顔の花

【初出】「心の花」十二巻四号（明治四十一年四月）「鈴菜すゞしろ」

・うす曇り遠いかづちをきく野辺の小草がなかの昼顔の花

↓補足 また、竹柏園選集『玉琴』明治四十一年四月「鬱金香」

・うす曇遠いかづちをきく野辺の小草がなかの昼顔の花

* 291・二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり菜の花のみち

【初出】「心の花」九巻三号（明治三十八年三月）「春雨小傘」

・二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり菜の花の道

↓補足 のち、竹柏園選集『あけぼの』明治三十九年六月「春雨小傘」

・二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり菜の花のみち

